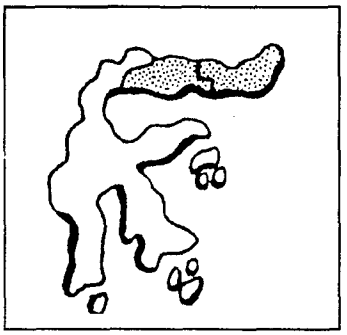


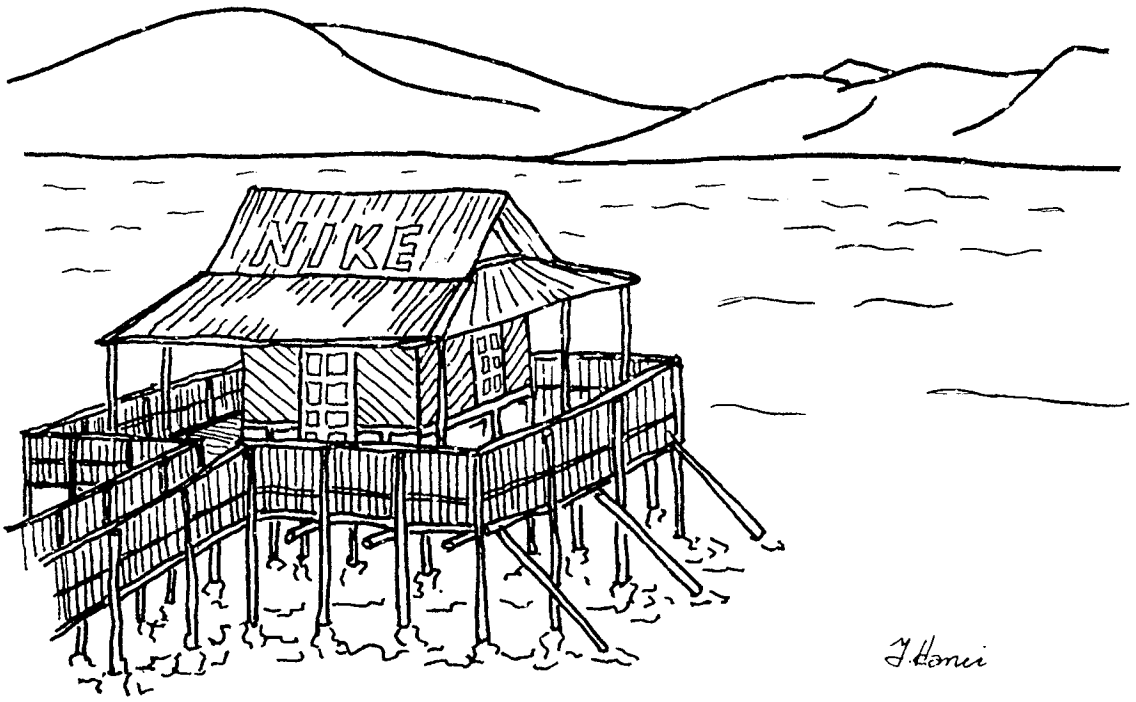
北スラウェシ日本人会
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第13号



目　次

1.	巻頭挨拶	後藤　昭	第　2頁
2.	北スラウェシ日本人会皆々様	石野	3
3.	最後の慰霊祭御案内	大之木英雄	7
4.	インドネシアの思い出	川口　博康	13
5.	ミナハサにおけるキリスト教について	青木　次郎	19
6.	ミナハサのアチャラ	長崎　節夫	23
7.	帰任報告	長崎　節夫	27
8.	編集後記	編集担当者	30

日本人会の皆様へ

在マカッサル日本国総領事
後藤　昭

今年も早いもので、1年の前半が過ぎようとしています。在留邦人の皆様にはお変わりないものと拝察しています。

先般、貴地マナドを初めて訪問して、邦人の一部（10名）の方々と懇談できたことは大変良かったと思います。皆様が逞しく生活しておられるのを伺って安心しました。

今回の北スラウェシ州公式訪問では、正・副州知事、州警察本部長等とも意見交換を行いましたが、その際、在留邦人の皆様に対する種々の配慮につき協力を依頼しておきました。

当地インドネシアにおける一番の気掛かりは、やはり鳥インフルエンザの感染です。鳥フルによる感染死者数は、相変わらずダントツの世界一（現時点で80人）です。やっと重い腰を上げた感のある政府の方針・規則も国民の理解を得られていないのが問題です。幸いにも、北スラウェシ州では、鳥フルの人への感染は今のところ出ていません。これは、州政府と北スラウェシ州住民が一体となって対応しているからだと件の州知事が自負していました。

今回の北スラウェシ訪問では、マナド以外の地を訪問することは出来ませんでしたが、当地マカッサルとは違った印象を持ちました。当地マカッサルよりも、ゆっくりとした時間が流れているとの印象でした。そのことが、昔から日本人のマナド、ビトゥンを含む北スラウエシへの来訪に繋がっているのかなと考えたりもしました。そして、皆様が北スラウェシに住んでおられることの理由の一端が分かったような気がします。

最後になりましたが、在留邦人の皆様が、今年の後半を無事平穏に過ごすことができますように祈っています。

2007年2月記

北スラウェシ日本人会皆々様

在東京　石野赫

年が改まりました。本年も宜しくお願い致します。月日の過ぎるのは早いもので、正月と思っているうちに、もう２月です。それに、ビトン港コンテナー埠頭建設工事が完成し、帰国してから三年が経ちました。「タルシウス」編集者長崎節夫さんの特別なお計らいで、お蔭様で北スラウェシとのご縁は切れず、こうして会報に名を連ねる機会を与えられ感謝している次第です。

ところで、昨年秋東京神田の古本屋街にぶらりと出かけ、古書を漁っていましたところ、偶然昭和５３年１月「ジャガタラ日本人会」発行による「ジャガタラ閑話－蘭印時代邦人の足跡」なる稀本に出会いました。早速手に取り、萩原敏夫さんと言う方の巻頭言を読みましたところ、これは再販で、初版は昭和４３年秋、故武田重三郎氏の編集によって発刊されたとありました。刊行の辞によればこれは「旧蘭領東印度（現インドネシア）各地に戦前久しく活躍した私共の先輩や同志が近年、寄る年波と共に櫛の歯が欠けるように減少し、その古く多彩な記憶や記録も早晩絶えることをおそれ、急遽有志の間でこれを一冊の本に纏める」こととして発刊せられたものでした。

また、「戦前に於いても日本人の平和的海外発展の理想像と言われた蘭印在留邦人の在り方が今更、業界始め言論界や海外に関心ある方々より見直され、その研究のためジャガタラ閑話の再販が各方面より要望され」再発行に踏み切った、とありました。

戦前にインドネシアへ進出されたいろいろな民間企業の方々５６名がこれに寄稿されており、まさしく中味は「約半世紀に亘る現地を回顧し、あらゆる面から邦人の発展の道程、苦心談、秘話、実録、活動状況など執筆を願った物であり、明治の中葉より大正、昭和１６年戦争突入まで現地の人と融合し、平和裡に従事した邦人の実史であり、また草分けとして生きた人々の哀史」（同巻頭言より）の綴りでありましたので、貴重な史料になると思い購入した次第です。

読み進む程に、戦前に当地で活躍された「企業戦士」の方々が如何にして現地の人々と共存していくかに普請され、事業を拡大されていったかが文の節々

に伺い知ることができました。戦前、民（みん）の力で斯様な企業拠点を着々と蘭印各地に築いてこられたのを知り驚きを禁じ得ませんでした。それと同時にあの戦争さえなかったら、との複雑な気持ちにさせられました。

その中で、当時ビトンで活躍されていた大岩さんに触れた一文、永福虎著「南方漁業の思い出」がありましたので、ここに一部転記しご紹介させても貰う事にしました。皆様は既にご存知と思いますが、この「大岩勇」さんのご長男、「富」さんは、ビトンにご健在で、先般の日本人墓地整備の際、いろいろご尽力頂いた次第です。この紙面をお借りして感謝の意を表したいと存知ます。

「ジャガタラ閑話ー蘭印時代邦人の足跡」（再版）
永福　虎　著　「南方漁業の思い出」

ボルネオやセレベスで鰹漁業を経営されていた折田氏や大岩氏（注）が終戦前後に相次いで亡くなられたので、南方漁業について草分け時代を語り得る只一人となったと言う事は、寂しいような気持がし、誠に感無量なものがある。

（注）この方は、愛知県出身で、お名前は「大岩勇」さんです。ビトンにて「大岩漁業」を興され、終戦と共に閉鎖となったようです。（石野記）

日本人漁業が南方に渡航した最も古い歴史は、真珠貝採取のため契約移民として濠州（オーストラリア）の木曜島やブルームに渡航した和歌山県人が最初で、其後広島県や愛媛県の漁業者が、比島（フィリッピン）へ渡航して、打瀬網漁業と一本釣漁業を試みたが、是等はおおむね失敗に終わった。その後、沖縄県人が、渡航して来てから追込網漁法が始まり香川県より流網漁業者を私共の手で渡航させた。その他ボルネオに折田氏が高知県より鰹漁業者を誘致し、セレベスでも大岩氏が鰹漁業を創めるなど、南方に於ける日本人漁業が漸次発展するようになった。

明治の末年私共がシンガポールに渡航してから十年位遅れ即ち大正初期に、シンガポールにいた漁業者が爪哇（ジャワ）に渡航して、沖縄式の追込網を今のジャカルタ市を根拠地として始めたのが邦人漁業者がインドネシアに進出した最初と言って差支えない。沖縄式の追込網は、シンガポールに於いては既に経験済みで、相当な成績も挙げていたので、ジャカルタでも成績が挙がり、両三年の間に三組となった。その後曳縄や流網漁業を試みたが余り面白い成績を挙げるまでに至らず中止した。当時はインドネシア人の漁業もすこぶる幼稚で、漁船に動力をつけたものは見られなかった位、皆、帆でやっていた。漁獲物の保

存や輸送に氷を使用する事すら知らなかった。我々が魚に氷を使用するのを見て、彼等が不思議に思った位であるから、魚の鮮度と言う事には全然無関心だった。鮮度に無関心であったと言うばかりでなく、魚の腐敗しているのと新鮮なのとの味の区別さえ判らなかったといっても過言ではない。バタビヤとかバンドンの一流ホテルで出される魚がプンと臭いがして私共には口に入れる気にならなかった事が思い出される。それもその筈、漁師も、魚を売る魚屋にしても鮮魚は何時間位すれば腐るか、という知識を持ち合わせていなかった。私共も常に魚屋が腐った魚を売り歩いているのを見せられた。この事実は当時のバタビヤに於ける鮮魚の取扱方法を述べると最もよく判ると思う。即ち現地の漁業者が沖に出て行くのは毎日夕方から夜中迄で、港に帰って来るのが朝から正午迄。そして魚市場で魚の競売が開始されるのが、十時頃から二時頃迄で、競落した魚を小売商人が買って籠に入れて売り歩くのだが、殆ど氷も使用していないから夕食の食膳に供せられる時は既に完全に腐敗している。併し、我々としては同じ様な方法で魚を処理する事は漁業者としての良心が許さないので、氷を使用して魚を市場に持込むばかりでなく、彼等にも魚の鮮度を証明し、新鮮な魚の味覚に対する注意を喚起する事に努めたため、魚屋も漸次氷を使用して奥地に魚を送る様になり、魚の鮮度が自然魚価にも影響する様になってきた。スカブミからバンドン辺迄魚を送る様になり、販路も拡張された。

（中略）

当時はインドネシア人の生活程度も低く、魚価も廉かったわけで、一キロが三十セント位だった様に記憶している。そればかりではなく鮮魚の売れ行きも悪かったので、漁船を一隻入れてもそれを一日に売らずに大抵二日位に売っていた。こんな関係で現地の魚価にも非常に影響して大恐慌を来たしたものだった。我々としては、販路の拡張も計らなければ折角魚を取っても売れない計りか、あまり安いと引合わぬ事になるので、バンドンから、ガローあたりまで、魚を送る事を考えて馬来（マレー）から魚の販売に慣れている華僑を連れて来て、奥地への販路をやらせたり或は当時バンドン、ガロー中心としてバスの交通事業に成功していた佐藤茂氏を煩わして輸送して貰うなど種々の方法を講じた。

我々が最初爪哇に渡航して漁業を始めるべく準備をしている際、当時の在留邦人の有力者から注意された言葉は今尚頭に残っている。「爪哇は塩が専売制度で非常に高い関係もあり塩干魚にして売らねば鮮魚で売っては失敗するだろう」と、成る程考えられそうな事であるが、我々が塩干魚の売れる所は鮮魚が必ず売れると言う自信を持っていたばかりでなく、爪哇や馬来は塩干魚を造るに仲々困難な事情があり、原価も相当高くなるので、鮮魚のまま売捌くに如くはないと思っていたから、そんな事には全然耳をかさずに専ら鮮魚の販路拡張と言うことのみ努力した。

東部の商業都市スラバヤにも漁船を廻航して鮮魚の販売に努力したが、市場の組織が悪くて売掛金の回収がうまく行かぬので、遂に断念してバタビアに引揚げた事もある。この様にして販路の拡張には相当苦労もし、又犠牲も払って漸次鮮魚を認識して貰える様になり、又鮮魚の如何により魚価にも影響を持たせる様になってきた。過ぎ去って見れば何でもない様な事でも、最初の草分時代には後の人が想像も出来ない位の苦労があったわけで、決して坦々たる道ばかりではなかった。

今は、遠くからビトンに思いを馳せる身ですが、再訪を企てたいとの考えは常時脳裏にあります。御地を訪れることができましたら、是非声を掛けさせて頂きますので、その節は宜しくお願い申し上げます。

完

平成19年2月吉日

元空戦
海軍第14期会
広島護国神社
海軍兵学校
その他海軍関係者　各位
呉水交会
関係御家族
その他有志

元海軍第14期飛行専修予備学生
元山戦闘機隊
当直　大之木　英雄

インドネシア・北スラウエシ

最後の慰霊祭御案内

1987年10月15日、私たち海軍第14期飛行専修予備学生、元山戦闘機隊員一同の熱い志と、乏しい金によって、インドネシア国 北スラウエシ州（旧セレベス島）ビトン市域、マネンボネンボ村に、主として堀内落下傘部隊の戦死者を弔う慰霊碑を建立して、今年は満20周年に当ります。

同期生も皆、満84才を超え、公式の慰霊祭行事を催すことが漸次困難になって参りました。

折しも以前より、今日あるを覚悟して、慰霊碑の今後の維持管理を如何にするかについては、何かと思案を重ねて参りましたが、幸い南スラウエシ州のマカッサル駐在の前日本総領事 渡辺奉勝氏、現総領事の後藤昭氏の大変な御配慮と、慰霊碑所在の北スラウエシ州ビトン市の日本人会の格別の御厚志により、同慰霊碑の維持管理について明るい見通しを持てるに至りました。

勿論、慰霊碑建立の時の北スラウエシ州政府との契約により、土地代並びに建設費は、すべて元山戦闘機隊が負担し、維持管理は北スラウエシ州政府観光局が行うことになって居りますので、北スラウエシ州政府に対しては、今年もかねて昵懇のサルンダヤン州知事、スワラン副知事を表敬訪問し、今後の維持管理について善処方、御願い申し上げる所存でありますが、インドネシア側と日本側の間に、時に意見の疎通の不充分を危惧されることもあり、上記、日本総領事館、並びに日本人会の御芳志を期待できることは、誠に有難い仕儀であります。

このような状況を勘案し、**正式の慰霊祭は20周年の今年を最後とし**、爾後は、**有志の墓詣り**という形に致したいと思って居ります。

本件は、元空戦の集い（元山戦闘機隊の同期会）国内大会、新年会の場で同期生の承認を得て居ります。

今年行います最後の公式慰霊行を、下記要領によって行いますので、今まで参加された方々、参加したことの無い方々、奮って御参加下さいますよう、心より御願い申し上げます。

関係者御本人は元より、奥様や御家族、又お知り合いの方々もどうぞ御一緒に御参加下さいますよう御願い申し上げます。

1. 慰霊碑建立及び今までの慰霊祭経緯

マネンボネンボの慰霊碑は、昭和 17 年（1942 年）1 月 11 日、北スラウエシ州のランゴアン飛行場に落下傘降下を行い、多数の戦死者をだした堀内落下傘部隊並びに南太平洋戦域で戦死した、陸、海将兵の御魂を祀ったものであります。

今回の慰霊行も従来通り、マネンボネンボ所在の上記慰霊碑前の慰霊祭が主たる行事でありますが、堀内落下傘部隊が、昭和 17 年 1 月 11 日落下傘降下した、ランゴアン飛行場跡（高原地帯）や、日本海軍の水上機の活躍したトンダノ湖の視察にも参ります。

又、マカッサル市に於いては、旧式の九七艦攻でアメリカのコンソリ B−24 の隊長機に体当り撃墜した木野中尉の慰霊や、B 級戦犯として無念の死をとげた人たちの卒搭婆慰霊祭も行います。

マネンボネンボの慰霊碑の建立は、14 期予備学の元山戦闘機隊の発意で行われたものでありますが、日本国 厚生労働省に、海外所在の旧日本軍の慰霊碑として正式登録されている他、

A. 平成 4 年（1992 年）1 月 10 日（落下傘降下 50 周年慰霊祭）

— 堀内落下傘部隊の生存者
— 海軍兵学校 78 期有志
— 14 期元山戦闘機隊有志

計　110 名余

で、マネンボネンボの碑前で盛大な慰霊祭を挙行。之により旧帝国海軍の認知を受けました。

B. 平成 10 年（1998 年）4 月 22 日

海軍第 14 期会公式行事として、14 期会本部より多数出席し、碑前で慰霊祭執行。

C. 平成 15 年（2003 年）7 月 20 日

石川統幕議長（当時）並びに古庄海幕長（当時）の承認の下、日本国 海上自衛隊の練習艦隊 3 艦が、ビトン港に入港。マネンボネンボの碑前に於いて、海上自衛隊と元山戦闘機隊の合同慰霊祭を挙行。
之により海上自衛隊の認識を得ることができました。

D. 平成 17 年（2005 年）6 月 15 日

広島護国神社、林禰宜及び後藤神官により神式により慰霊祭執行。

以上の通り、当マネンボネンボの慰霊碑は、日本政府、旧帝国海軍、海上自衛隊並びに海軍第 14 期会に於いて正式に認知された慰霊碑となって居ります。

更に、広島護国神社より正式に神事を戴いて居るのであります。

今回は、広島護国神社、藤本宮司の御厚志により、護国神社の神官、職員 3〜4 名の参加が見込まれ、マネンボネンボ慰霊祭に於いて、碑前で巫女舞が献上されることになりました。

マルク海を見晴るかす丘の上で、蒼天の下、厳粛な神事が行われ、英霊も嘸、御喜びのことと思います。

2. 帰途立寄りますバリ島は、既に御存知の如く、正に南海の楽園です。
有名なバリ舞踊など御覧になり乍ら、ゆっくりとくつろいで戴けると確信して居ります。
特にお天気の良い朝、ホテルの庭園で摂る朝食など素晴らしい雰囲気です。
ホテルには充分に気配りし、バリ島のインターコンチネンタルホテルの他、マカッサル、メナドに於いても当該地で最高のホテルを準備して居ります。
北スラウエシ州は、住民の多くがクリスチャンで温和な人柄です。堀内大佐の占領行政が抜群に良かったお陰で、メナド、ビトン、マネンボネンボー帯の対日感情は大変良好です。
風光も明媚なところで、メナドの沖合のブナケン島は、沖縄と並んでスキューバダイビングの世界的な名所になって居ります。メナドから海上フィリピンのダバオや、パラオ島は至近距離にあります。
東京方面の参加者の利便を考え、乗機地も、成田と関西空港の二つに致しました。殆ど同時刻にバリ島に着く予定です。
関西空港より　20名以上
成田空港より　15名以上
と、勝手に予定させて戴いて所要旅費を計算して居ります。
何卒、多数の御参加を心から御待ちして居ります。

3. 慰霊行事

(1) マカッサル市に於いて

7月2日

a. B級戦犯処刑者慰霊

テロー村のマリア・マカハベさんの庭にあるB級戦犯処刑者の卒搭婆37基、慰霊

7月2日

b. 日本海軍将兵墓参

バンティムルン村の農家の庭にある旧帝国海軍将兵の墓8基、慰霊

7月2日

c. 木野中尉慰霊碑、参拝

昭和18年9月、マカッサルにたった一機残っていた九七艦攻に搭乗し、来襲中のアメリカ コンソリB－24の隊長機に体当り撃墜した木野中尉並びに、真鍋上飛曹の慰霊碑に参拝。

(2) メナドに於いて

7月4日

a. ビトン市域、マネンボネンボ村所在の慰霊碑前に於いて堀内落下傘部隊、その他南太平洋戦域の戦死者の慰霊祭執行。神式。巫女舞の献上。

・北スラウエシ州代表
・ビトン市代表
・マネンボネンボ村　村長
・　　〃　　小学校校長
・　　〃　　小学生児童80～100名

} 全員に日本から持参した記念品贈呈

・その他、地元民　参加

7月4日

b. ランゴアン飛行場跡

トンダノ湖、戦跡慰霊

マネンボネンボ慰霊祭終了後、専用バスにて山を登り、堀内部隊が落下傘降下したランゴアン飛行場跡にて慰霊。

又、日本海軍の水上機が兵器弾薬輸送に活躍したトンダノ湖視察。

7月3日

c. ビトン市　日本人墓地参拝

ビトン日本人会が、先年整備された日本人墓地に参拝。

4. その他の主な行事

(1) 7月2日

マカッサル日本人総領事館に後藤総領事、表敬訪問（一部代表）

夜、後藤総領事夫妻、領事館員と当方参加者全員の会食

(2) 7月4日

メナドの謝恩パーティー

慰霊碑建立20周年記念パーティー　　於：メナド　リッチーホテル

招待者　：　北スラウエシ州知事夫妻
北スラウエシ州副知事夫妻
北スラウエシ州観光局長
ビトン市長夫妻
マネンボネンボ村長
マネンボネンボ前村長
マネンボネンボ小学校長
関係警察署長
慰霊碑、所在土地提供の地主（カウナン氏）
1987年慰霊祭に参加した小学生（当時）80名
メナドの旅行社PANDUの幹部
その他、御世話戴いた方

（註）謝恩パーティーの費用は、元山戦闘機隊の「北スラウエシ州慰霊碑基金」から支出致します。

5. 行程（別紙、ご旅行日程表参照）

(1) 出発　　平成19年7月1日　　関西空港 / 成田空港

帰着　　平成19年7月8日　朝　　関西空港 / 成田空港

(2) a. 関空、或いは成田よりガルーダ・インドネシア航空（国営）にて、バリ島デンパサール空港へ。（所要時間　6～7時間）

同夜、バリ島　泊（インターコンチネンタル・ホテル）

b．翌7月2日、ガルーダ航空の朝便にてバリ島よりマカッサル（ウジュンパンダン）へ。

10：10　マカッサル着

各地、慰霊

12：00　ホテル（ゴールデン・マカッサル・ホテル）へチェックイン。

午後、代表が日本総領事館へ表敬訪問。（他の方はホテルで休憩）

夜、総領事他と会食（全員）

（註）マカッサル（オランダ名）は又、ウジュンパンダン（インドネシア名）とも云います。

c．7月3日　11：00

ガルーダ航空で、マカッサルからメナドへ。代表は、州政府表敬訪問及び日本人墓地、日本人会へ。他の方はホテル（リッチー・ホテル）で休憩。

d．7月4日

09：00	ホテル出発。マネンボネンボに向う。
10：00	マネンボネンボ慰霊祭
11：00～15：00	ランゴアン、トンダノ湖等、戦跡視察
夜	リッチーホテルで謝恩パーティー

e．7月5日　メナド　→　バリ島（デンパサール空港）

ホテル　インターコンチネンタル

f．7月6日　バリ島観光

夜　日本レストラン（“祭”）にてお別れパーティー

g．7月7日　18：00頃迄　　自由行動

（ホテルは18：00迄利用できます。）

夕食　バリ舞踊見物

深夜便にて帰国

h．7月8日

朝、関空或いは成田着

6．旅費（見積書参照）

関空発　　御一人　261,000円（20名以上）

成田発　　御一人　278,000円（15名以上）

計入されている費用
- 航空運賃、ホテル代
- 朝食　全部
- 昼食2食は自弁、その他全部
- 夕食　1食は自弁、その他全部
- その他見積書参照

（註）上記、自弁の食費、各食事のアルコールや飲料、その他、チーム全体で支払う経費に当てる為、共通経費として各人より若干金額を徴収し、定められた会計責任者が一括して支払、後日決算報告を行う。

平成19年5月24日

北スラウエシ慰霊祭参加者各位

元空戦の集い
当直将校　大之木　英 雄

（第2回　ご案内）

平成19年度　インドネシア　北スラウエシ州

マネンボネンボ他　慰霊祭

拝啓　新緑の候、御清昌御慶び申し上げます。
このたびは、頭記慰霊祭にご参加戴き、厚く御礼申し上げます。
本日、第2回のご案内をお送り致します。

1.　参加者

1	磯辺　幸雄	（飛予　14期　元空戦）
2	菅　孝夫	（飛予　14期　元空戦）
3	藤村　邦正	（飛予　14期　元空戦）
4	大之木英雄	（飛予　14期　元空戦）
5	若山　正治	（兵学校　73期）
6	田村　潤二	（兵学校　75期）
7	林　友昭	（広島護国神社　禰宜）
8	村田　賢次	（広島護国神社　神官）
9	大之木雄次郎	（大之木建設社長　英雄の甥）
10	母里　義男	（飛予　14期）※現地参加
11	小田　典子	（元山空遺族）
12	久野　万里子	（元山空遺族）
13	田賀谷久美子	（元山空遺族）
14	米津　昌子	（元山空遺族）
15	大本　訓子	（広島護国神社　職員）
16	岡山　雅子	（大之木美智子　友人）
17	大之木明美	（雄次郎夫人）
18	大之木美智子	（英雄夫人）
19	添乗員　　嘉本　俊介	

計　19名

インドネシアの思い出

２００７／５／１９
川口　博康

①　インドネシアに初めての上陸

私がインドネシアに始めて上陸したのは２３歳の時でした。
以下にその顛末を記してみます。

学校を卒業し海技免状を取る事ができ３年後始めて船長としてまぐろ船に乗船しました。
当時は高度成長期の真最中、すべての漁船は遠洋漁業を目指しました。船長や機関長・無線長といった法定職員は引っ張りだこでした。
当時のまぐろ船は漁労長が全てを仕切っていまして、同期の目標は３０歳で船頭＝漁労長になることでした。船長はその前段階です。

ジャワ海でまぐろ延縄を行い、満船帰途に着きました。
乗船していたまぐろ船の使える航海計器はロランＡだけでした。赤道付近ではこのロランＡは殆ど使えませんでした。夕方の天測で船位を確認し、一刻も早く帰りたい思いから最短コースであるアロール海峡に進みました。
灯台も無い真っ暗な闇夜の中を推測航法だけで海峡を通過しようとしたわけです。
もう少しのところに来た時、ザザーと船底がサンゴ礁に触れて座礁してしまいました。船体に受けるショックは大きくなかった事から無事操業が終わり入港を楽しみに殆どの船員は寝ていました。起きてきたのは２～３名でした。
まずは状況確認をしました。すごい潮の流れのなかにありました。このような潮の流れは想定外でした。完全に私の経験不測からコースの選定間違いです。
私のショックは大きく動転しました。

真っ暗闇の中でサーチライトに照らし出されたのはふんどしだけの現地の男たちの姿です。よく見ると手に持っているのは銃です。この時、脳裏をかすめたのは「襲われるのではないか」という事です。座礁以上のショックが船内を包みました。
この姿を見た私は「人食い人種」の発想しかできませんでした。会社に何といって無線を打とうか。彼らが襲ってきたら狭い船内では逃げ場も無い。誰も口には出さなかったもののえらいことになったと感じていた事は確かです。
一瞬、座礁したことはどこかに飛んでいきました。

恐怖の一夜が更けていく中で陸の人たちの数は一段と大勢になっています。
この人だかりに船内は静まり返っていました。

双眼鏡を覗いていた船頭が突然「おい、鉄砲ではなく水中銛ではないか」と叫び声をあげました。うれしかったですねこの一声。船内が生き返りました。
明るくなるに従い人々の様子を観察するに直ぐには襲ってきそうも無い気配です。
向こうも大勢で我々の様子を伺っているようです。

船内は一気に離礁・脱出に向けて気持ちが一つになりました。
ボートを降ろし船底・スクリュー・キングストンなどのチェックをしました。大きな損傷無しの報告。長老達も経験した事の無い早い潮の流れです。これ以上船が陸に行かないようにまずアンカーによる船固めをしました。小さなボート一隻での船固めは非常に危険で困難なものでした。一昼夜以上かかりました。
次にスクリュー付近のサンゴ礁を砕く作業です。干満の差が非常に大きく、干潮時には船体が全部サンゴ礁の上に出てしまいました。離礁時にスクリューを傷めないための作業です。
次に「自力離礁」するために、船を少しでも軽くするために捨てられるものは全て捨てる作業です。この作業やるなかで現地の人達との輪は日に日に小さくなっていきました。
既にお互い「危険は無い」ことを理解できる雰囲気が作られてきました。一部の勇敢な親切な人達によってこれらの作業を行うことができました。
漁具を陸に上げる作業。氷を捨てる作業を手伝いに来た人達が始めて氷を触った時の怪訝な顔が思い出されます。初めて得体の知れないものを触った時のあの表情は思い出すたびにふきだしてしまいます。
日毎に彼らとも打ち解けるようになり、船内にも入ってくるようになりました。
作業も手伝ってくれましたので何かお礼にと尋ねたところすぐさま「塩」を欲しいとのことでした。塩がそんなに貴重なのか認識を新たにしました。船内にはマグロの干物を作るために大量の塩を持っていました。全部持っていってもらいました。
彼らはお礼にと生きた鶏数羽とたまごを持ってきてくれました。非常に良い関係の中で彼らの助けを借りながら沢山の作業をこなす事ができたわけです。
私の祖父は常に「海難に会ったら欲を捨てよ」と言っていました。それを始めて実行したのがこの作業です。数日かかりました。
同郷の僚船もマグロ漁を中断して近くに待機してくれています。心強かったですね。

漁具、氷、飲料水の一部、その他、捨てるものは全て捨て、スクリューの周りのサンゴ礁も取り、いよいよ「自力離礁」です。
期待と少しばかりの不安の入り混じるなかで満潮時に合わせ全員配置につきました。
船固めの船尾側のアンカーロープ二本をキャプスタンと人手によって巻き締め、エンジンは機関長に「破裂してもやむなし」「フルアスターン」を依頼。私はすでにこの時点では声がつぶれてでませんでした。

大勢の現地の人達が見守る中で離礁作業がスタートしました。ロープを引く者、
エンジンを操作する者それぞれが一つになった瞬間でした。
１０分なのか２０分なのか確かな時間は分かりません。船はかすかに動き出しました。
完全に「自力離礁」に成功し、バンザイの声をあげる中で新しい力がよみがえって来ました。すぐさまアンカーを切断し、待機していたＢ丸に横付け、曳航されながら安全なところに移動しました。その時には現地の皆さんに「ありがとう」を伝える暇はありませんでした。
翌日、会社のフラッグシップであるＭ丸が清水港から救助にかけつけてくれました。清水の芸者衆の慰問袋の中に追分ようかんが入っていました。今でも忘れられないほろ苦い味がする特別の羊羹です。この時のＭ丸の漁労長は私の父親でした。父親の船に曳航されて何とか清水港に到着したわけですが悔しさと恥ずかしさばかりで、うれしい気持ちはありませんでした。

南方航路でよく見かける風景にさんご礁に座礁した無残な姿の船を見ます。何年も船体をさらしながら打ち果てていく姿は痛ましいものです。何とかこうならずに全員無事に母校に帰れたわけです。このような形で私はインドネシアとかかわりをもちました。
また船長としての第一歩が以上のとおりでした。

余談ですが、インド洋でまぐろ延縄漁を終えシンガポール経由で帰途につく途中、昭和４４年１０月６日大型タンカーと行き違い、しばらく走ったところでタンカーが大爆発を起こしたのを目撃し、すぐさま救助に向かいました。大きな噴煙がとれると船尾だけが棒立ちになっているのが見えました。
現場に到着後直ぐに全乗組員に人命救助の態勢につかせ、ゴムボートを降ろし重油の中で木片につかまっている乗組員を助け出しました。多くの人は本船に引き上げると気を失いました。おもいきりビンタをなぐらせ気付かせるようにしました。額に大怪我をしている人などの応急処置で３００トンの漁船のデッキはさながら戦場でした。
３２名全員を油の海から助け出す事ができました。船長として始めての人命救助です。
国際法では人命には対価を求めないとなっています。しかし、あの爆発のなかで全員生きていた事が奇跡でした。
関係国の大使と海上保安庁長官から感謝状と記念品を頂き、記念品の壷の一つが人命救助の証として私の手元に残っています。
人生にはさまざまな場面があることを振り返る年齢になってきました。
最後までお付き合い頂きありがとうございます。
皆様のご多幸をお祈りしております。

２００７／５／１９
御前崎にて

インドネシアの思い出

川口　博康

②　ブナケン島

私は４０歳で海上生活から足を洗いサラリーマンになりました。この時から鰹節の原料となるカツオを探す為に東南アジア放浪の旅が始まったわけです。インドネシアにも訪れる機会が多くありました。

当時、日本の鰹節業界は「削りパック」が一般的に流通するようになった為、花かつおの原料となる鰹節は脂分の少ないものを要求していました。脂分が多いと酸化おこし味が変化し、香りが悪くなり、花色もピンクから褐色に変わってしまいアピアランスが悪く消費者に買ってもらえないということになります。

また今までは一本釣の遠洋漁業船が獲ってきた冷凍のカツオが主流でしたが、新しく「かつおのたたき」が開発され爆発的に売れるようになり、たたき業者も原料としてこの遠洋漁業一本釣船のものを使うようになったため鰹節メーカーは原料が不足するようになって来ました。

脂分の少ないカツオは赤道付近の海水温度の高いところにいる事からインドネシアの田舎をあちこちと回りました。ビトンは昭和の初め頃から日本人によって開発された町です。

この町の開発で忘れてはならない人は、原　耕　と　大岩　勇　両氏でしょう。

この時代のことを知っている初代ビトン市長のウォーランさんも昨年亡くなりました。

この町の成り立ちは日本と深い関係にあったということを知っている方が少なくなっています。非常に残念です。私は鹿児島の枕崎市はビトン市と姉妹都市になっても良いのではと思っています。

私は２５年前ビトンに入りました。当時のビトンの夜は暗く電球も小さな物で手探りの状態でした。日本の戦争賠償で作った漁業基地の一つがビトンにもありました。ペリカニです。当時はここに日本人も居ましたのでこのゲストハウスに宿泊していました。

ここでブナケンというすばらしい海があることを教えてもらい仕事の合間に早速連れて行ってもらいました。上陸するだけの探検気分でした。ここで見たものは強烈な刺激ある光景でした。小さなバンガロー（掘っ立て小屋）の椅子に北欧のすっぽんポンの女性が太陽を一杯浴びて寝そべっているではないか。驚きでした。この島はこのような形で使われていたのです。未だ興奮やまない内に探検を中止し早々と帰途に付きました。

その後、現地のロッジのオーナーと知り合い時々ブナケンに行きスノーケリングを楽しんでいました。すでにデバカメより海の魅力に取り付かれ、インドネシア出張が楽しくなっていました。海に潜るために仕事を作ったようなものです。以前クラバット山に一緒に登ったＫさんも言っていたことを思い出します。「山に登りたいから今の仕事をやっている」

５０歳になった時、何となく虚しくなったことから仕事以外に何かをやってみたくなり結

局はダイビングのライセンスを取るここにしました。
私のダイビングは海の中までは電話はかかってこない。時間の仕事を忘れられる。海のなかの素晴らしさに加えてこんなことが気に入って始めました。
串本でイセエビの泣き声に出会った時は中学生の時，素もぐりでイセエビを捕りに行った時に聞いた泣き声を思い出し感激しました。
仕事の合間に九州の南の無人島で漁船をチャーターし思い切りダイビングを楽しんだは良かったのですが帰りに台風に会い帰れなくなった事もありました。

インドネシアではカツオを探しながら沢山のダイビングスポットを訪ねました。
しかし、ブナケンのドロップオフはどこよりも素晴らしかった。あのどこまでも続く紺碧の深みはスリルもあるが自然の凄みを感じる。時々あの深みに向かって潜って行きたい誘惑にかられ、神秘すら感じるときもありました。

５５歳定年、会社では海外でもどこでも好きなところに行ってよいとのことから、ビトン駐在を申し出たところすんなりＯＫがでました。早速ワンマンオフィスを立ち上げカツオ節作りに挑戦しました。仕事は異文化の中で一喜一憂、悩みもありました。
しかし、ブナケンに現地の友達や工場の幹部たちと訪れ駐在の一人暮らしを癒したりしてすごしていました。日本からのお客様を何回かお連れし、ブナケンの素晴らしさを宣伝もしました。日本からお見えになる方々は仕事のスケジュールのみで何も余裕がないのは残念でしたね。
特記すべきは日本では絶対海に入らない家内がブナケンの海に魅せられてスノーケリングをやるようになったことです。私も驚きました。すでに２０回くらいビトンに行っていますが毎回といっていい程ブナケンを訪ねています。
特にチャチャのれい子さんと知り合ってからは一層ブナケンが好きになったようです。
れい子さんの落ち着いたホスピタリティに私のファミリイは非常に安心感を持っているようです。我家の一番人気のスポットはブナケンのチャチャ次がラフテング（川下り）です。必ずこの二箇所はトライして帰ります。旦那さんのラフさんが指導したというイタリア料理もいいですね。ブナケンで蛍に出会えるとは思っても見ませんでした。この前お邪魔した時、タルシウスもいるとのお話でした。
夜は、テラスで飲むウイスキーが好きです。少しの海風と月明かりがあればなお良い。

家内と時々一昨年スノーケリング中に出会ったナポレオンのことを思い出しては話しています。おそらく二人だけの墓場まで持って行きたい誰にも分からないひとコマです。
すごく大きなナポレオンに平行して泳ぐ中であの大きなメダマでジロリと我々を見るのです。何か通じたような一瞬でした。
人生には誰にも言わないで自分だけが大切に胸の中にしまっておくところがあっても良い

と思う。その方が夢もロマンも壊されないでいてくれるようです。

北スラウェシ州ミナハサにおけるキリスト教について

青　木　次　郎

北スラウェシ、ミナハサに住んで居られると、宗教に関わりが無くても、色々と宗教的な行事にぶつかってしまう事があるのではないでしょうか。日本と違ってインドネシアでは宗教を持たないと言うことは許されないのです。従って誰でも必ず自分の宗教というものを持っていて、それに従って生活しているのです。

よくインドネシア人に「あなたの宗教はなんですか」と聞かれて「何もありません」と言うと、「えっ、どうして」と不思議に思われる事があります。前に或る本でアメリカから来ていた留学生に、仲良くなった日本の学生が「あなたの宗教は」と聞かれて「何もありません」と答えたら、「とても信じられない、あなたは少し頭がおかしいのではないですか」と言われたということを思い出しました。

日本には宗教等を信ずるものは、意志の弱い者と言う考えを持つ人が居りますが、日本でも昔は全てが寺の檀家であり、先祖が仏教だから家族全員仏教の信者であって、その定めの中に生活の基準を置いていたことがあったのです。今のインドネシアがそれと同じなのではないかと思います。生まれた、結婚した、子供が出来た、死んだ、と言う記録は全部寺がやっていたと同じように、今のインドネシアではそれぞれの教会、寺院、モスク等がこれを行い、全てがこの何れかに属する。すなわち信仰とはそれぞれ個人の意思でなく、家がそれだからと言う事で、私は仏教だ、クリスチャンだと言っているのではないでしょうか。

現在、人口２億のインドネシアの宗教人口は、イスラムが９０％、その他が１０％と言われておりますが、ここ北スラウェシ、特にミナハサ地区では逆にキリスト教人口が90%になっています。しかし、これ全てが果たして本当の信仰による宗教とは考えられません。しかし、この地域では全ての行政が信仰人口の多いキリスト教に基づいて行われることが多く、集りに於いて賛美歌、祈り、説教等による近所つき合いがあって、日本人には戸惑う事が多くあるかと思います。そこでこのミナハサに於けるキリスト教に付いて、その歴史、日本との関係、組織活動に就いて記してみたいと思います。

歴史

北スラウェシ、モロッカ諸島に於けるキリスト教の最初の布教は、1563年に香辛料を求めて航海していた、ポルトガルの難破船が海流に乗って流され、モ

ロッカ海峡のサギヘ(サンゲル)島にたどり着いて、上陸したポルトガル商人によって行われたとされています。

又、他の資料によれば、14世紀にポルトガルの宣教師が嵐でテルナテに流されて、ここで伝道を始めたのが最初だとも言われています。その後次々と香辛料を求めて、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスなどから来た商人達によって、キリスト教、特にカトリックが伝えられていったのですが、本格的な伝道布教活動はなされておりません．元々この地域に於ける土着の宗教はイスラム、キリスト教と同じ一神教的要素を持つ信仰であった為、素直に受け容れられたのですが、商人たちが居なくなった後これを引き継ぐものが無く、組織的布教がなされず其のままに成ってしまっていたのです。しかも、新しく渡来して来たイスラム教の勢力が強く、多くの者がイスラム教に移ってしまったのです。

1822年になってセレベス島のメナドにランメルス、ケマにムルラール等の宣教師が来て布教を始めたと言う記録がありますが、その活動に付いては定かな事はわかりません。

1824年英蘭協定によって蘭領東インドとなると、オランダはキリスト教を広める足掛かりとして、北セレベス島、モロッカ諸島に1831年6月21日正式にリェデルとスワルズと言う、ドイツ人とオランダ人のプロテスタントの宣教師を派遣して、新しく福音を述べ宣教を始めたのです。そしてポルトガル、スペイン商人によって広められていたカトリックの信者にプロテスタントへの改宗を薦め、改宗する住民に洗礼を授け、ここにインドネシアプロテスタント教会を建てたのです。現在インドネシア政府はこの6月21日の福音宣教を始めた日を記念して、国の祝日として定め、休日とし、各教会では記念礼拝が行われております。1934年9月30日ミナハサ福音教会(GMIM)は、このインドネシアプロテスタント教会から分離して発足したのです

日本との関係

1942年　第2次大戦勃発、日本軍はその進駐によって宗教統制の為、日本キリスト教団より20名の牧師がインドネシアに派遣されております。うちの4名、芦名、中村、篠原、木島牧師は43年12月赴任途中、敵潜水艦の襲撃にあって戦死を遂げています。その他は44年6月と9月の2回に分けて、中部セレベスに藤崎、アンボンに松田、塚原、本宮、加藤、花房。マカッサルに瀬谷、木田、宮平、安村、メナドに浜崎、高木。パンゼルマシンに鈴木，金田、本田夫々牧師らが赴任しております。

この中の宮平牧師は戦前からマカッサルに居て、北セレベス・キリスト教会連合会を設立しました。メナドに赴任した浜崎、高木両牧師は海軍の要請によっ

てメナドキリスト教連合教会を創立しました。浜崎牧師は当時を回顧して戦後このような手記を残しております。「ミナハサは学校でも病院でも特にキリスト主義と言う必要は無く、師範学校でも、農学校でも男女各中学校でも、教師も生徒もすべてキリスト者です。私は今までの80余年の内、大正7年神学校を卒業以来、50余年の牧会と伝道の生涯を省みて、戦時中のミナハサの人々と過ごした約2年ほど、悔いの無い生甲斐を覚えた事はありません。初めから終わりまで全く摂理的な神の恵みであったと感謝の他ありません。時折ドミネハマザキと呼ばれましたが、そんな敬語で呼ばれると、こそばゆさを感じました。多分オランダ人が牧師に対する敬語として呼ばせたのでしょう。海辺の漁村や山間の小部落まで、馬車も通れない細い道は馬に乗って巡回したものです。至る所で歓迎されました。私はただ教会の議長だのアシスタントを連れて行き、『日本の憲法第28条には、国民は信教の自由が許されており、日本の敵国がキリスト教国であるからと言って、キリスト信者を誤解したり迫害したりする事は間違いだ、そのために私は皆さんが迷惑したりする事の無いように、派遣されてきたのです』と私の使命を述べるだけで彼らは安心して、私は歓迎されたと言うわけです」と。

このような当時の思いやりの宣教活動があってこそ、このマナドに今の教会が保たれているのではないでしょうか。

戦後には、キリスト教海外医療協力会より、田村医師がミナハサ福音教会ベデスダ病院に派遣され、マナド地区の医療奉仕をする傍ら、キリスト教の伝道に大活躍をしています。また、加藤亮一牧師はインドネシアの恵まれない青年たちのために、東南アジア文化友好協会を設立して、これら子弟の教育の為自分の教会に寮を建てて奉仕活動しています。

これら隠れたキリスト教徒としての小さな奉仕が有ってこそ、現在のミナハサ地区住民との交流が繋がれているのだと思います。

グミンの組織、宣教活動

マナド市、ビートン市を含め現在ミナハサの人口は110万人と言われております。その90%がキリスト教徒です。プロテスタントが多数でカトリックは少ないです。プロテスタント教会は組織や教義内容の違いによって多くの教派に別れていますが、その中でトモホンに本部を置くミナハサ福音教会が最大で、ミナハサ地域のクリスチャン全体の90%、約90万人近くの数を占めています。

この組織は頭文字をとってGMIM(グミン)と呼ばれていて、現在750の教会があり、1,300人、内60%は女性の牧師によって運営されています。また、775の地域を85の教区に区分し、ほかに305人の宗教教育者と教師が居て、学校や教育機関を運営しており、その他国内・国外に派遣牧師が多数出向しています。

尚グミンが運営する教育機関としては幼稚園 332、小学校 364、中学校 20、高校 13、神学校 1、大学 1、他に職業，家政、ホテル、経営、工芸学などの教育を行っている専門学校があります。また、トモホン、ビートン、マナド、アムランその他の地区に病院があり、孤児院、身体障害者施設。貧困家庭の子供への奨学金なども行っています。

蟠りのない交流

ただ、単に私たちは外国の人々と交流すると言うだけなら易しいと思います。しかし、その国の事、そしてその国の人々の事を本当に知って交流するという事は難しいのではないでしょうか。今私たちが住んで居るインドネシアの事について、私達はどれだけのことを知っているでしょうか。

戦争の時代を生きてきた人も、戦後の経済大国といわれる時代を生きてきた人たちも、若い今の人たちも、未だ昔の統治時代の思想が、無意識のうちに心の中にあるのではないでしょうか。

それと同じようにこの国の人々の心の奥に、今も強く刻み込まれて残っているのは、かっての帝国軍隊の事であり、経済大国を傘に着た日本人の事等ではないでしょうか。これらの事について今のインドネシアの人達が如何に思っているだろうかと考えた事がありますか。

戦後インドネシアに長く住んで、深くインドネシアを愛していたNHKの記者が、滞在ビサの書き換えをするため役所に行ったが、中々事務が捗らず行く度に「明日」「明日」といわれて、とうとう怒りが爆発して「なぜ、この程度の手続きにそんなに時間が掛るのだ、日本だったらこんなもの、とっくに終わっている所だ」と言ったら、それに対する答えは「ここはインドネシアだよ」の一言であったとのことでした。

その記者は、正しくここはインドネシアであって、私の国ではなかったのだと大いに反省させられたと、彼のインドネシア紀行文の中に記されていました。

わたし達は上っ面だけの付き合いでなく、お互いの全てを理解しあって、本当の部分、心からの付き合いをもてる関係を築いて行かなければならないと思います。

ミナハサのアチャラ

長崎節夫

2ヶ月の予定が6ヶ月もの沖縄滞在となって、本当に久しぶりにビトゥンに戻りました。半年ぶりに見るビトゥンは新しい市長が町の美化に力を入れているとのことで、車から見る範囲ですがかなりこぎれいになったと感じました。

今回のビトゥン滞在は8日間だけでしたがその中の3日はいろいろあってトモホン通いとなりました。メナードからトモホン街道を登っていくとトモホン市街に入る手前がキニロウ区になります。キニロウ区に沖縄二世のタマシロタマエおばあちゃんとその一族が住んでいて、5月18日に一族のアチャラをやるから、と呼ばれたのです。

ビトゥンからメナード経由で1時間30分、タマシロ家に着いてそこから山道に分け入って20分、山中の番屋に到着しました。番屋の中にも外にも一族の皆さんが料理の真っ最中です。ひとつのテーブルには数人がかりでなにやらの肉料理、別のテーブルには野菜班、焼き魚チームもいます。ひとりのおじさんが節の長い青竹をかついできて一節ずつ切断しました。これに肉を詰めて蒸し焼きにするそうです。

私はお客さん扱いで、一通り見物のあとテーブルについて飲み物をいただきました。ポリ缶からグラスに注がれたのは白くにごった液体です。話には聞いていたのでピンときました。今日溜めたばかりのアレン（サトウヤシ）の樹液です。よろこんで飲んでみると、旨い！甘酸っぱくてカルピスそっくりです。アルコール3％入りのカルピスというところですか。お替りもいただいていい気分になってきました。

タマエおばあさんのお友達、と称するおばあちゃんもやってきました。芳紀78歳。「こんにちは」と日本語であいさつされました。「子供のときに日本軍がやってきて日本の学校ができたのでわたしもそこで勉強した。」そうです。子供のときは日本語をふつうに話したけど、もう忘れたと言って、かわいらしい声でうたいだしました。モーリノアオバノ　カーゲーニキテ　、「このうたならわたしもわかる」、いっしょに歌いました。次の歌は　「マーシロキツジノ　ケーダカサヲ」　ミナハサのご婦人方はお年寄りだけでなく若い人でもこのうたを歌います。次は　「マモルモセムルモクロガネノ」　ときて「うみゆかば」まで、おばあちゃんの独演です。

おばあちゃんがいい気持ちで歌っている間にあちこちのテーブルにご馳走が並べられ、キリスト教式のお祈りのあと「カカレ！」となりました。「長崎さんはカライのにがてたから」と辛くない料理もたくさん準備されて、たらふくいただきました。

「コレ、タメシテミマスカ」。いやな予感がします。さきほど調理台の下にネズミのしっぽらしきものが5，6本ころがっていたのです。「ティックス（ねずみ）か」。「そうです」。一瞬ためらいましたが，まてよ、これはめったにないチャンスだ、と思い直しました。豚も四足ネズミも四足、食えないことはないだろう。肉の一片をフォークで突き刺してかじりつきました。小骨まじりで食べにくいな、と思ったとたん、たっぷり添えられたトウガ

ラシが効いて口内火事になりました。したがいましてネズミがおいしかったかマズかったか、よくわかりません。

ちなみに、この日調理された材料は、ブタ、イヌ、ネズミ、コウモリ、魚（ロウニンアジ、オオグチイシチビキ）でした。ヘビは「手にはいらなかった」そうです。食材の多様さもさることながら、チンケ（丁子）林の中での宴会めずらしいことばかりで楽しい一日となりました。

番屋のまわりの丁子の木は、つぼみが顔を出したばかりで、８月には収穫の最盛期になるそうです。収穫時期の再訪を約束して山をおりました。

それでは「今日の料理」、豚肉の青竹詰め（ Tinoransak）です。

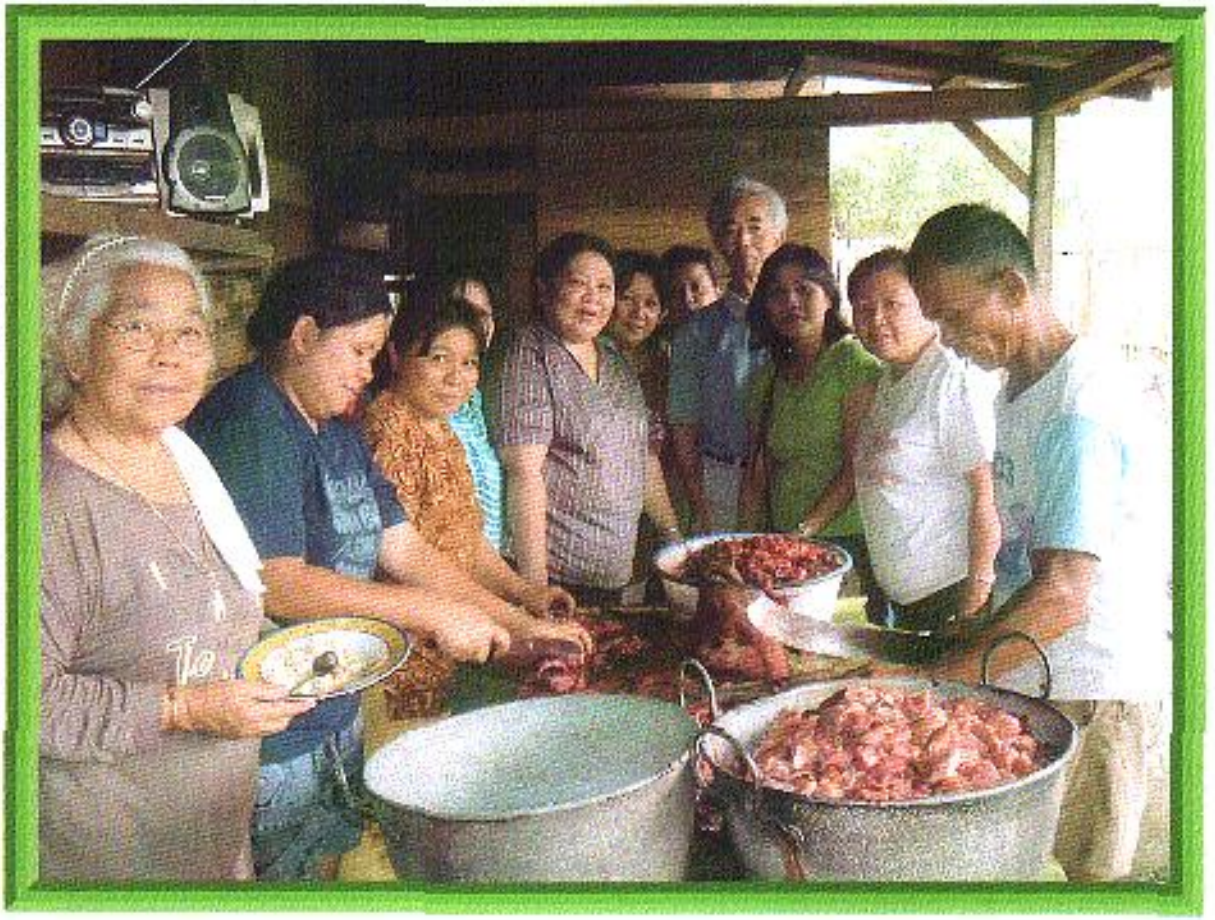
１．材料　豚肉　適量（以下すべて適量）
豚の血
Daun bawang（ネギ）
Daun Juluk（レモンの葉っぱ）
Jahe　（しょうが）
Daun Kemang
Daun Serey
Lombok　（だいこん）
Garam　（塩）

２．調理方法

豚肉は一口大に切る。
ネギ以下の香味材は細かく切り、適当な容器（中華なべ等）に入れて豚肉、血とまぜ合わせる。
用意した青竹に詰めて、薪の火で竹の表面がこげるまであぶる、

アレン(砂糖椰子)

丁子の木



ごちそうを準備する玉城ファミリー

玉城タマエさんと娘婿2人

帰任報告

長崎節夫

一身上の都合により長期の沖縄滞在を余儀なくされましたが、ようやくにして現場復帰のメドがたちました。ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。

体の異常に気が付いたのは一昨年の半ば頃であったと思います。ある日「便」の表面に赤い糸のような血の筋がついていることに気がつきました。「大腸に異常あり」「もしかしたら痔の一種かも」と思いながらも、痛くも痒くもないのでほったらかしていたところ、ある日の外出中に、肛門に錐をさしこまれたような強烈な痛みがきました。痛みは三分ほどで消えたので気になりながらも相変わらずのんきにかまえていました。痛みをおぼえたのはそのときの一度だけです。日本に住んでいたならこの段階で検査を受けていたかもしれません。

そのうちに、昨年のはじめ頃から便通がおかしくなってきました。便秘になったり下痢気味になったりで、体重もこのころから減ってきました。しかし私は現地の医療水準に不信感が強く、「病院に行ったほうがいいのでは」と言う周りの皆さんの声も聞き流していました。それでも一応自分なりに心配はしていて、石野さんが置いていってくれた「家庭の医学」をめくって、この症状は大腸（または直腸）癌にほぼ間違いないというところまで分かりました。

10 月に入って下痢がひどくなり仕事も普通の生活も難しくなってきたので、ついにメナドの町医者の門をたたきました。この医院は以前から沖縄三世のハンス君に勧められていた医院です。予約した時間に行ってみると初老の院長と看護婦兼事務の女性一名の小さな診療所でした。型どおりの問診のあと、診察室の片隅にある寝台にねかされてエコーをかけられました。メナドの町医者がエコーサウンダーを持っているのは予想外でした。エコーによる検査の後、パンツを脱がされて肛門に指を突っ込まれました。これで診察終了。診察の結果は予想していたとおりで、早急に手術を受けなくてはならない、しかしメナードには内視鏡などを備えた病院がないからジャカルタかスラバヤにいくようにと言われました。

手術ならば日本がよいのではないか、ということになって早速チケットの手配からはじめ、沖縄の身内にも病院の手配を依頼して急遽帰国しました。

沖縄では「沖縄県立南部医療センター」という病院におせわになりました。子供のころからケガなどで何度かお医者さんのお世話になってはいますが、本格的な病気で病院のお世話になるのはこれが始めてです。おまけに開院してまだ 1 年そこらの新しい病院は見るものすべて「病院」に対する私のイメージからかけはなれたことばかりで、周りの心配をよそに本人は検査から手術、術後の医療を結構興味を持って体験しました。

「イメージからかけはなれたこと」の第一は検査設備です。血液分析、エコー探査はす

でにメナードで体験していましたが、ＣＴスキャン、ＭＲＩ、内視鏡、なんだか鉄腕アトムの世界に入り込んだような気分で少なからず興奮しました。

手術は催眠術をかけられて眠りこけている間にやられてしまい、気が付いたら病室のベッドに寝ていたので、その経過についてはは全く記憶にございません。

手術直後に運び込まれた病室は「回復室」というか、術後の患者を監視する部屋のようでした。そこで眠りからさめたわけですが、下腹部にチューブが 3 本差し込まれ、左腕に点滴のチューブがあり身動きできません。腹部を 20 センチほどバッサリ切られていては動けといわれても動ける状態ではありません。この部屋に三日住んで四日目には普通の病室に移りました。

病室は四人部屋ですがカーテンで仕切ると個室になります。それぞれのベッドに連絡用のベル、電話、酸素の配管などあるのは型どおりというところですが、テレビ、冷蔵庫、収納棚、机などが備えられているのは想定外でした。以前に友人を見舞いに行ったメナードの病院（マララヤン）のことを思いだしました。病院の施設設備だけではなく、私のような貧乏人でも医療費のことを心配することなく高度な医療を受けられるということなど、日本とインドネシアの医療事情のあまりの違いに、自分が日本人であることのありがたさを痛切に感じました。

手術から退院まで丁度一ヶ月の入院でしたが、普段はめったにみないテレビを観たり、本を読んだり、時々仕事をして（電話をかけたりファックスを書くだけですが）、素敵な看護師さんたちとおしゃべりしたり、適度な間隔をもって身内や友人たちが見舞いにきてくれたり、たいして退屈しないで過ごすことができました。

当然のことですが、一応は直腸癌の摘出手術を受けた病人ですから楽しいことばかりではありません。手術後 2 週間ほどたって体力がすこし回復したのをみはからって、抗がん剤の投与（点滴）がはじまりました。癌の種類や症状によって抗がん剤もいろいろ使い分けられるようですが、私の場合は 2 週間に一度のペースで四種類の薬液をほぼ 50 時間かけて注入、という方法がとられました。入院中に２クール、一度退院してから再入院して１回、あとは自宅で３クールの合計６回やられました。抗がん剤投与に並行して検査も適宜おこなわれました。

抗がん剤の副作用は、ついこの本で読んだりしてしていたので覚悟はしていましたが、やっぱりただごとではありません。頭がフラフラする、視力がおかしくなる、食欲がなくなる、吐き気がする、枕のまわりに頭髪が散らかる（髪の毛がパラパラと抜け落ちる）、おしっこが近くなる、さすがの私もこのときだけは病人の気分をたっぷり味わいました。副作用も人によっていろいろということですが、「長崎さんは冗談をいう元気もあるから軽いほうだ」と言われました。元気はないけど楽しくやっていただけですが。

抗がん剤投与は当初予定１２回（６ヶ月）のところを、検査結果良好ということでひとまず６回でとどめたので坊主頭になるのを免れました。その後の検査結果も良好で、現在は体力的にも 10 年前くらいの状態に戻った感じです。手術前はちょっと体を動かすと息切

れしたり、疲労の回復が遅かったり、それを歳のせいだと早合点していたのですが実は病気のせいであったわけですね。

はじめての大病でいろいろ勉強になりました。これからは心を入れ替えて精進したいとおもいます。今後ともよろしくお願い致します。

編集後記

今号は 3 月に発行の予定が、担当者の故障によって大きくずれこんでしまいました。申しわけありませんでした。

さて、現時点の北スラウェシ日本人会で特記すべきことは、マネンボネンボの慰霊碑が建立 20 周年をむかえることかと思います。

当慰霊碑は 20 年前（1987 年）に、旧元山（げんざん）航空隊戦闘機隊の有志の方々によって建立されました。今号掲載の慰霊祭案内状にもあるように、これまでほぼ毎年当地にて慰霊祭を開催してきましたが、ご関係の皆様もすでに齢 60 の半ばとなりましたので、今回の 20 周年記念慰霊祭をもって（元山航空隊としての）正式な慰霊祭は打ち切ることになりました。元山空としての慰霊祭は今回が最後としても、この慰霊碑の価値はむしろこれからますます輝きを増すでしょう。

当慰霊碑は資産としては北スラウェシ州政府の所有になりますが、2 年前から日本人会が管理を手伝っています。試行錯誤のなかでいろいろやっていますが少しずつ慰霊公園らしくなってきたかと思います。この慰霊公園のあるべき姿として、青写真はもっと立派なものを考えていますので今後ともご協力をおねがいいたします。

なお、今までこの慰霊碑（霊園）の名称がなくて適当に呼称していましたが、今回、建立・管理の中心になっている大之木氏に命名していただきました。所轄のビトゥン市にもこの名称で登録します。

名称　　元山記念霊園　（ GENZAN MEMORIAL PARK ）

今号は準備期間中に担当者が沖縄滞在中であったために、現地の皆様との連絡がおもうようにならず、原稿の収集に手抜きがありました。次号はできるだけ早い機会に発行したいと考えていますので、会員の皆様は催促されずとも原稿の準備をお願いします。前にもすこしこのことに触れましたが、この種の会報は継続することに意義があります。隣の犬が仔犬を何匹産んだ、というのでも結構ですから筆をとってください。

今回も表紙は羽根井さんです。トンダノ湖畔で食べたイカンマスが忘れられずにこの絵を描いたそうです。古人曰く、サンマは目黒、イカンマスはトンダノ。